

英語教師が知っておきたい日本語のしくみ

英文法・英作文指導に活かす
高嶋幸太 著

四六判・208頁・
本体1,700円＋税

[評者]
佐藤誠司



読み物としても中高の英作文指導の手引書としても役立つ一冊

日本語教師として海外・国内で豊富な指導経験を持つ著者は、本書のねらいとして、①日本語を深く理解する、②日本語を知ることによって英語への理解をより一層深める、③英語の文法説明やライティング指導などで日本語文法の知識を役立てる、の3点を挙げている。

6章構成で、受身・使役・敬語・時制・語句の対応などさまざまな表現形式における日英の違いと、和文英訳の指導を行う際の注意点が詳しく説明されている。以下、本書中の例題と説明より紹介する。

1. 父は今ロンドンです。
 2. このケーキは私が食べます。
- 「は」は主題（「～に関して言えば」を表す）。1の「父」は主題かつ主語（動作・状態の主体）でもある。2の「このケーキ」は、主題だが主語ではない。この違いが英訳に影響する。
3. 机の上にバッグがあります。
 4. 私のバッグは机の上にあります。

「ある／いる」を使った日本語の文には、存在文と所在文とがある。存在文には新情報を表す「が」が使われ、there構文で英訳する(3)。所在文には旧情報を表す「は」が使われ、通常のSV

の文型で英訳する(4)。

5. 父は今、テレビを見ています。
6. この鳥は死んでいます。

「～ている」が、5では「進行・継続」を表し、現在(完了)進行形で英訳する(is watching)。6では「結果の状態」を表し、形容詞・過去分詞などで英訳する(is dead)。そのほか「～ている」は、習慣・反復、経歴・経験などの意味に応じた時制を使う。

また、随所に出てくる日本語と英語の文法用語の比較が興味深い。たとえば次のようなもの。

- ・英語の形容詞の用法は叙述と限定の2つだが、日本語の形容詞は連用形が「副詞的用法」を持つ(例：頭が重く感じる)。
- ・日本語の受身は、①直接受身、②間接受身、③持ち主の受身の3種類。②③は英語の受動態に対応しない。
- ・日本語のタ形(「行った」など)が過去・完了なら過去形・完了形で英訳するが、モダリティ(発見・想起・確認・命令など)なら過去形は使わない。

英語教師なら誰もが経験するように、多くの学習者は日本語と英語を1対1で対応させようとする。だから「それを買った」はI bought it. と英訳できても、「それを買います」をI buy it. と誤訳してしまう。本書によれば、この例ではル形が話者の意志を表す(だから英訳にはwillを使う)。このように本書中の日本語文法に関する知見は、英語教師にとって教えられるところが大きい。また本書に収録された和文英訳などの豊富な例文は、中学・高校での英作文の指導に大いに役立つだろう。

(さとう せいし・
佐藤教育研究所代表)

英語教師のための「実践研究」ガイドブック

田中武夫、高木亜希子、藤田卓郎、滝沢雄一、
酒井英樹 編著
A5判・272頁・
本体2,200円＋税

[評者]
小林大介



暗黙知を実践知へ。現実と理想の狭間で葛藤する教師のための成長ガイドブック

英語教育において「実践研究」に対する注目度が高まっている。しかし、興味・関心はあるもののなかなか踏み込めない、あるいは具体的に何をするのかわからないなど、「実践研究」に対する印象には個人差があるのが現状であろう。

教育に携わる全ての人に共通しているのは、目の前の児童、生徒、学生の成長を願い、現実と理想の狭間で日々葛藤しているということである。その中で獲得してきた「暗黙知」を「実践研究」を通して「実践知」として発展させ、教師の成長を促してくれる心強い味方が本書である。

本書は、全9章で構成されている。「ガイドブック」と書名にあるように、「実践研究」の進め方が具体例を交えながら順を追って丁寧に説明されており、第1章には実践研究の基礎知識が過不足なく記されている。続く第2章では8つの事例が紹介されており、この2つの章を読めば「実践研究」とは何か、そしてその方法や過程がいかに多様であるかを理解することができる。

第3章では、「実践研究」の肝

である「問いの立て方」について述べられている。問いを立てる上で必要な先行研究の情報源を提示してくれているのも有難い。

第4章から第7章までは、研究に客観性を持たせる「データ」について述べられている。

第8章では「口頭発表」と「論文」を軸に「実践研究」を共有・公開する意義と方法を学ぶことができる。

最終章では、「実践研究」が教師にもたらす効果や、教師が「実践研究」に取り組む上での課題について記されており、これまでの章を読んだうえでその足を踏んでしまう読者の背中を優しく押してくれる。

本書は、「実践研究」を通じて読者を成長へと導く“メンター”と、様々なテーマの研究を例として提示しながら視野を広げてくれる“仲間”という2つの軸が常に読者に寄り添う形で展開される。

また、本書が対象とする読者は英語教育に従事している教員や学生、院生に止まらない。その内容は校種や教科を問わず、「実践研究」に興味を持っている全ての方にとって有益であろう。さらには2022年から実施される新学習指導要領における「総合的な探究の時間」のような課題研究を柱とする科目でも参考図書としてお薦めしたい内容である。

まずは日々の教育実践を思い浮かべ、その上で本書を手にとってほしい。そして本書を読み進めながら、自身の実践を言語化し、段階を追って実践研究へと繋げ、自身を成長させてもらいたい。その成長は必ず学びの深化として日々の実践に還元されるはずである。

(こばやし だいすけ・
静岡市立高等学校教諭)

英語教育用語辞典 第3版

白畑知彦, 富田祐一, 村野井仁,
若林茂則 著

四六判・386頁・
本体2,500円＋税

[評者]

中川右也



進化し続ける英語教師の座右の書

昨今、教育界では学習指導要領改訂により著しい変化が起きている。時代の変化に合わせ約10年毎に改定される学習指導要領と同様に、発展する科学の知見を取り入れた英語教育の変革に合わせ、継続的に改訂を行っているのが本辞典である。収録用語数は初版800語、2版930語、今回の3版は1,030語と進化し続けている。

新しい用語を加えるだけでなく、取捨選択しながら解説を吟味し直し、コンパクトに収める工夫が施されており、初版から定価が変わらないのは驚きである。

新たに加えられた用語には、CLIL や EMI といった著者たちが専門とする英語教育、第二言語習得の分野に限らず、active learning, 21st Century Skills, SDGs など、教育学や関連分野の用語も網羅されており、英語教師にとっては All in One であることも特徴の1つと言える。

さらに、辞典では時代による言葉の移り変わりを改訂毎に反映させるが、本辞典も対応する用語が複数存在する場合には、時代に合わせ、より適切なものを優先して見出し項目としている点にも、著者たちが細心の気配りをしながら辞典を編んでいることが垣間見え

る。例えば2版では、実験研究の対象となる人を表す用語として subject (被験者) を見出しの項目にし、participant (参加者) という呼び名もあることが紹介されていたが、倫理的な観点から後者を使うことが多くなったことを踏まえ、改訂版では participant を見出し項目に変更している。

この書が専門用語辞典の役割も果たしていることは言うまでもない。用語は特定の学問分野で用いられる際、一般辞典に記載されている意味だけでは理解が得難い時もある。例として、教師の内省で重視される用語 journal は、一般辞典にある「雑誌」や「日記」ではなく、授業実践などを通して「気づいたことを書き記したもの」を表す。このような専門用語も一般に理解しやすいよう、平易な言葉で簡潔に記載されている。

外部試験や学習過程評価の導入に伴って、特に高校現場では CEFR や IRT, portfolio など、新たな用語を見聞きすることも多くなってきた。本辞典を使って調べると、参考文献も付されていることがあり、さらに深い知識を得たい場合、水先案内人の役割も果たす。近年になって急速に用いられるようになった上記の用語は、改訂前から掲載されていることから、時代を先読みするヒントも隠されている。

多忙な日々を送る教師であっても、本辞典を机の上に置き、空き時間に数個ずつ項目を読み進めて勉強するといった活用も可能である。英語教師にとってまさに座右の書である。

(なかがわ ゆうや・鈴鹿高等学校教諭、
名古屋市立大学非常勤講師)